

住まいに対する子どもの嗜好把握と評価手法

—平面・立体コラージュを用いた理想とする住まいの制作実験を通して—

豊橋技術科学大学 建築・都市システム学専攻 修士2年 建築計画学研究室 北野太一(指導教員：藤田大輔, パクミンジョン)

1. 研究の背景と目的

近年、まちづくりにおいて施設利用者等から意見を収集するワークショップが多く実施されている。しかし、その多くは大人や中・高・大学生を対象としており、小学生以下の子どもが参加する事例は限られている。子どもが参加したワークショップでは、大人のみでは得られにくい多様な視点が抽出されており、子どもは身の回りの空間に対して大人とは異なる視点を有する場合があるため、空間に対する心理的評価は、子どもに対しても実施することが重要である。しかし、公共的な場に比べ生活の基盤となる住まいを対象にした研究は少ない。また、住まいへの意見や嗜好を明らかにした研究は限られており、その嗜好等を把握する手法も確立されていない。

そこで本研究では、住まいに対する子どもの嗜好を把握するとともに、その把握に有効な手法を構築することを目的とする。

2. 研究方法

被験者の嗜好を把握する手法としてSD法等の物を作らない手法や模型等の物を作る手法がある。前者は意見表出が苦手な被験者の場合、適応が難しい可能性があり、後者は年齢等によって表現方法に差が生じる可能性がある。そこで本研究では自由度が高く子どもの個性が反映され、制作物を通して心理的評価できるコラージュに着目し、住まいに対する子どもの嗜好を以下3つの研究で評価する。研究1：平面上で制作するコラージュ(以下、平面コラージュ)を用いた理想とする住まいの制作実験

研究2：理想とする住まいに対する嗜好変化の評価

研究3：立体的に制作するコラージュ(以下、立体コラージュ)を用いた理想とする住まいの制作実験

3. 研究1：平面コラージュを用いた住まいの制作実験(表1)

豊橋市にある学童保育施設1園に通う児童21名を対象に理想とする住まいを制作させ、完成した制作物に対してヒアリングを行い、嗜好等を分析した。その際、住まいにおける現在と理想とする好きな場所の特徴を「個人」「家族」「友達」と「屋内」「屋外」の組み合わせによる6つのタイプに分類し、屋外型では「景色を眺めたい」「外で遊びたい」発言がみられたため、屋外型を「景色」と「遊び」に分けて評価した(図1)。現在の好きな場所では、屋内型は81%(17/21人)で、理想とする好きな場所では、屋外型は71%(15/21人)であった。現在は屋内を好み、理想は屋外に関心を持つ傾向がみられた。特に現在集合住宅に住む子どもは全員屋外型で「庭や自然で遊びたい」要望がみられた。また、屋外型の中では男の子は「遊び」が多く(9/10人)、女の子は「景色」に着目していた(3/5人)。

これらの傾向から子どもは住まいに対して屋外空間への関心がみられ、その傾向は性別や現在の住宅形式が関わると考えられる。

4. 研究2：理想とする住まいに対する嗜好変化の評価

住まいに対する嗜好変化を評価するため、研究1の1年後、一部の子どもを対象に同様の実験を再度行った。その結果、嗜好が大きく変わらない子どもと変化がみられる子どもが半数ずつ存在した。中学年以降では昨年と同様の構成が多く、空間的嗜好は変化しない傾向がみられたが、低学年では屋内構成の変化や鑑賞した映画等の住まい外の影響を受けた例も確認された。

これらの結果から住まいに対する嗜好変化は学年で異なり、低学年は様々な経験が反映される可能性があるため、嗜好把握において外的要因を考慮することが望ましいと考えられる。

5. 研究3：立体コラージュを用いた住まいの制作実験(表1)

研究1と同施設に通う子ども17名を対象に、写真を立てて理想とする住まいを制作させた。まず、住まいにおける現在と理想とする好きな場所を研究1と同じ方法で評価した結果、現在は屋内型が

多く、理想は屋外型が多い結果となった。男女差をみると屋外型では男の子は「遊び」が多く、女の子は「景色」に着目しており、研究1の結果と比較すると、平面・立体コラージュの両者で嗜好結果は類似していた。次に、ヒアリング内容を基に写真の配置関係から空間同士の繋がりを評価した。繋がりが多いものとして、屋外空間とLDKが多く、両者の隣接関係を求める傾向がみられた。また、LDKが繋がりの対象となることが多く、子どもは住まいの中でLDKを中心とした構成を意識していると考えられる。さらに、屋外同士や屋内同士等の同カテゴリ内での繋がりが多くみられ、子どもは活動内容に応じて空間を細分化する傾向が伺えた。

これらの傾向から、子どもは屋内の連続性を考え、LDKを中心に遊び等が展開されるような構成を理想とすることが示唆された。

6. 嗜好把握における平面・立体コラージュと他手法との比較

本研究で用いたコラージュと被験者の心理を把握する他手法との比較を、物を作らない手法と作る手法に分類して行った。物を作らない手法は、簡単な作業のため低学年にも適用でき、特に写真を用いた手法は、被験者の撮影内容を通して嗜好傾向を把握しやすい反面、制作物を伴わないため、空間構成を把握するには限界がある。物を作る手法は、制作物や制作過程を分析できる反面、部材数や作業量の多さから適用可能な年齢層が限定される傾向がある。これらの比較から、コラージュは物を作る手法でありながら作業が比較的簡単な手法として位置づけられる。平面コラージュは子どもが好む個々の空間(写真)の把握に適しており、立体コラージュは好みに加え、空間同士の繋がりの把握に有効であると考えられる。また、低学年では作業が簡単な平面コラージュや写真を用いた手法が適し、中学年以降では配置関係を把握できる立体コラージュや物を作る手法を併用することでより心理把握ができると考えられる。

7. 結論

住まいに対する子どもの嗜好とそれを把握する手法を整理した。子どもは自然等の屋外空間への関心がみられ、その傾向は性別や現在の住宅形式が関わると考えられる。また、LDKと屋外空間との繋がりを意識し、LDKを中心とした遊び等が展開される構成を理想とする傾向がみられた。さらに、平面コラージュは低学年からも意見を収集しやすく、空間の好みを把握しやすい一方、立体コラージュは空間の好みに加え、住まいの立体的な空間構成を把握しやすい反面、低学年にとっては作業内容が難しい場合がある。以上より、年齢に応じて平面・立体コラージュを使い分けることで、子どもの嗜好や住まいの空間構成等を段階的に把握できる可能性がある。 ※紙面の都合上、参考文献と脚注は割愛する。

表1 各コラージュの制作物の一例



手法	平面コラージュ	立体コラージュ
遊び	2B, 3B, 1B	1D, 2C, 6B, 1A, 1B, 2A, 6A, 2B, 3C, 4A
屋外		
景色	3C	3A, 3B, 3G, 4C, 4B
屋内	1A, 1C, 1D, 1E, 4A, 4C, 2A, 2C, 3A, 3D, 3E, 3F, 3G, 3H, 4B, 5A, 6A, 6B	1C, 1E, 3D, 3E, 3F, 5A
	個人 家族 友達	個人 家族 友達

図1 住まいにおける好きな場所(左：現在, 右：理想)